

「水上ビル」、豊橋市民なら誰もが知っている“まちなかの象徴”といえるこのビルは、高度経済成長期の昭和30年代後半、文字通り暗渠化された農業用水（「牟呂用水」）の上に建てられた3～5階建ての鉄筋コンクリート造で、水路に沿って長さ800mに及ぶ「板状建築物群」である。

戦後のいわゆる“ヤミ市”から派生したいくつかの商店街を、市街地再開発のなかで、防災・美観の観点から整理する際、中心市街には既に十分な代替地がなかったため、やむなく、用水の上空を利用しようというアイデアに至った。再開発事業に関わる鉄道会社などの出資により、水路上に住居付店舗を建設して、移転してもらい、代わりに土地の提供をうけるもので、“上モノ”のみを所有し、土地は河川管理者より借地するという形がとられた。



「水上ビル」というのは愛称で、実際には「豊橋ビル」、「大豊ビル」、「大手ビル」の3つ異なるビル群からなる。「豊橋ビル」は、養鰻組合を母体とする株式会社の所有で、1・2階が飲食店舗及び事務所、3～5階が賃貸住宅となっている。「大豊ビル」は、商店街組合に属する個人による所有で、タテ割りの3階(一部4階)建て長屋である。1階を店舗とし、上階を住居に充てている。「大手ビル」も1・2階を個人所有、3～5階はコマ割りで県営の賃貸住宅になっている。

豊橋は、食飴・駄菓子の産地であり、鉄道交通の要衝であったことから、菓子問屋を中心に花火、玩具、靴、雑貨といった卸問屋が軒を連ね、東三河一円、遠州・南信地区など沿線から豊橋産品を求める“担ぎ屋”のおばさんで大変にぎわった。

僕自身は、“生粋”の「水上ビル生まれ」、「水上ビル育ち」である。建物とほぼ同じ齢を重ね、十数年の東京暮らしから6年程前に帰郷し、再び「水上ビルの住人」となった。両親は、依然、「水上ビル」で商店を営んでいるが、中心市街地の衰退の波はここにも押し寄せ、往時のにぎわいも消えて久しい。“周回遅れのフロントランナー”と揶揄される懐かしい商店街のたたず

まいは、それでも、安い賃料が奏功して、1階を若者向けのブティックなどの店舗として借りようという個性的なオーナーも多く、古くからの商店と混然とした状況は、現在も独特の個性を放っている。とはいえ、建築から45年が経ち、次の10年のうちには居住（所有）者の多くが世代交代をむかえ、今後の対応が迫られるが、現状では建て替えは望めないため、いずれは用水に戻すことになる。しかし、壊すまでの10～15年余の間、この“おもしろい”建物が、どうすればスラム化・陳腐化せず、元気に少しでも長く生き延びることができるかを考えて行きたいと思う。

昭和30年代以降に建設された数多くのマンションや団地が、これから次々と建て替えの時期をむかえる。その中で、新しいアイデアや価値観、新しい工法、資金の調達手法や法整備の動きが起ってくるのだと思う。“元気に待つこと”が選択肢を拓ける可能性はある。



駅南デザイン会議によるワークショップ:「まちづくり座談会」の様子

幸いにして、中心市街地への関心が高まってきている昨今の状況を追い風に、豊橋駅周辺でも再開発を含めた様々な試みが活発になっている。

我々も「まちづくり交付金」などの補助をうけて、地域住民参加のまちづくり協議会「駅南デザイン会議」をスタートさせた。今年度「まちづくりビジョン」をまとめる。

「水上ビル」を“まちの背骨”と捉えたアートイベント「sebone (セボネ)」は、昨年で6回目の開催となった。

商店街へは、頻りに小・中学生が社会見学に訪れ、毎年のように建築やデザインの学生が卒業制作のテーマとして、また、大学の授業で設計課題の対象に取り上げてくれる。「水上ビル」に多くの人が興味を持ち、考えてくれることがうれしい。この場所が、この先も豊橋のまちに寄与するものであり続けることを願っている。

豊橋駅前大通南地区まちなみデザイン会議
常務理事 黒野 有一郎 (建築クロノ)